

平成23年2月28日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530846
 研究課題名（和文）
 幼稚園・小学校の全領域における国語力の向上を図るカリキュラム開発の基礎研究
 研究課題名（英文）
 The Basic Studies of Progressing Japanese Language Ability in Child Education
 研究代表者
 世羅 博昭（SERA HIROAKI）
 四国大学・生活科学部・教授
 研究者番号：30171359

研究成果の概要（和文）：

1. 絵本の中のことばを対象に、幼児の「ことばの理解度」を調査した結果、3・4歳児は「語」を中心に理解する傾向が強いが、5歳児になると、「語」と「語」の関連を通して、文脈を理解するようになるということが分かった。
2. 長年の教職経験を持つ教師に、小学校国語・算数・社会・理科、各教科における「つまずきことば」を3段階に分けて評定し、その結果をデータベース化した。この各教科のデータを、岡本夏木とヴィゴツキーの論を援用して4つの視点から分析するとともに、各教科に通じる「つまずきことば」を克服する指導上の留意点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

1. Kindergarten children's understanding of words in picture books were checked. 3,4-year-old children understand "a word" separately. But 5-year-olds understand words in their contexts.
2. The difficult words in school subjects were classified as a database by veteran teachers' ratings. These difficult words were analyzed by four view points coming from the theories of Natsuki Okamoto and Vygotsky. According to them, some points of teaching methods for the difficult words were proposed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	2,600,000円	780,000円	3,380,000円
平成20年度	500,000円	150,000円	650,000円
平成21年度	500,000円	150,000円	650,000円
総計	3,600,000円	1,080,000円	4,680,000円

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発

1. 研究開始当初の背景

- (1) 小学校2～3年頃になると、国語科・算数科だけでなく、社会科や理科などにおいても、学力の「ふた瘤駱駝現象」が生じているという実態があること。
 - (2) この現象を克服するためには、岡本夏木やヴィゴツキーの論を援用して、ことばの発達を「1次的事ことば」と「2次的事ことば」の二重構造でとらえる視点に立つことが有効であるとする仮説を立てたこと。
 - (3) 折しも、学力の向上が叫ばれ、文部科学省から、学校教育の全領域において、「国語学力の向上を図る教育」の推進が提起されたこと。
- これらの3点をふまえて、幼稚園教育も視野に入れ、小学校の各教科等における「つまずき」の実態の把握と、その上に立った国語力の向上を図る指導法の開発を図ろうとするものである。

2. 研究の目的

幼稚園と小学校の連携を図り、幼児期から小学校6年間にわたる〈ことばの発達〉を見据えた国語教育カリキュラムの開発が究極の目的であるが、今回は、その基礎を固めるために、次の研究を行うこととする。

(1) 幼稚園部会の場合

① 当初の目的

「絵本の読み聞かせ」を行うことによって、4・5歳の子どもが、「絵本」の中にある「2次的事ことば」（岡本夏木）をどのように習得していくのか、その実態を把握し、「2次的事ことば」を習得させる指導の原理と方法を探る。

② 最終の目的

【研究1】＝集団の「読み聞かせ」の場面で、幼児が分からないという語句を取り上げて、その語句について幼児の理解を自由に発表させたり、動作化させたりする方法の有効性を探る。

【研究2】＝「小学校低学年教科書にも採択されている話の絵本」を取り上げて、その絵本の中の、3・4・5歳児が理解し難いと思われる語彙の発達経過を明らかにする。

(2) 小学校部会の場合

小学校の国語・算数・社会・理科、各教科書の中における「2次的事ことば」を習得するときの「つまずき」の実態を把握するとともに、その「つまずき」を克服するための指導の原理と方法を探る。

- (3) 全体の研究の目的…幼児期から小学校への移行過程を縦断的に見据えて、どのように「2次的事ことば」を習得させるとよいか、その指導の原理と方法を検討する。

3. 研究の方法

当初、大学部会・幼稚園部会・小学校部会

を設置する予定であったが、大学の研究代表者・連携協力者も、幼稚園部会と小学校部会に所属するように改めた。

4. 研究成果

(1) 幼稚園部会の研究成果

【研究1】（第1年次の研究成果）

◇研究の目的…集団の「読み聞かせ」の場面で、幼児が分からないという語句を取り上げて、その語句について、幼児の理解を自由に発表させたり、動作化させたりする方法の有効性を探る。

◇調査の対象…幼稚園5歳児

◇研究の方法…ビデオ録画→分析・考察

◇研究の成果…絵本の中の「幼児が分からないことば」を取り出して、その理解をオープン・エンドの方法で発表させたり、動作化させたりすることは、子どもの自由な想像を枠にはめるのではなく、かえって、分からなかったことばを豊かに想像することができるので、絵本の内容を豊かに受けとめることができることが分かった。

【研究2】（第2・3年次の研究成果）

◇研究の目的…「小学校低学年教科書にも採択されている話の絵本」を取り上げて、その絵本の中の、3・4・5歳児が理解し難いと思われる語彙の発達経過を調べる。

◇調査の対象…保育所・幼稚園3歳児(24名)・4歳児(35名)・5歳児(35名)

◇研究の方法

①調査の手続き…クラスの幼児をA(4月～7月生)・B(8月～11月生)・C(12月～3月生)の3グループに分ける→各グループから男女2名、担任が無作為に選ぶ→担任が絵本の中の「難しいことば」の理解度を5段階尺度で評定する。

②調査に使用した絵本(傍線部2冊は共通)
・3歳児…「スイミー」「おおきなかぶ」と「三びきのこぶた」ほか2冊。
・4・5歳児…「スイミー」「おおきなかぶ」と「かさこじぞう」ほか2冊。

③選定語句…大学側で絵本ごとに、また年齢ごとに「難しいと思われることば」を抜き出し、担任保育士に5段階評価で評定してもらった。

◇研究の成果

(1) 絵本の「難しいことば」の品詞分類

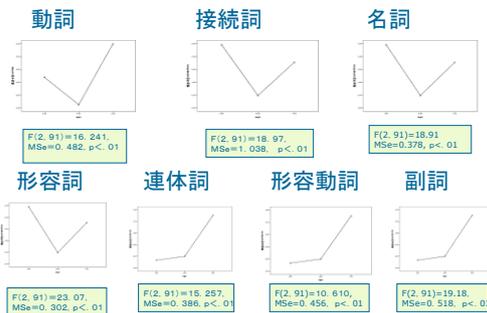
①3歳児の場合(5冊)…名詞60語、副詞28語、動詞35語、形容詞13語、形容動詞5語、接続詞20語、連体詞20語。

②4・5歳児の場合(5冊)…名詞39語、副詞29語、動詞31語、形容詞5語、形容動詞7語、接続詞5語、連体詞12語。

③4・5歳児の「スイミー」「おおきなかぶ」の場合)…名詞7語、副詞16語、動詞10語、形容詞4語、形容動詞3語、接続詞4語、連体詞6語を抽出。

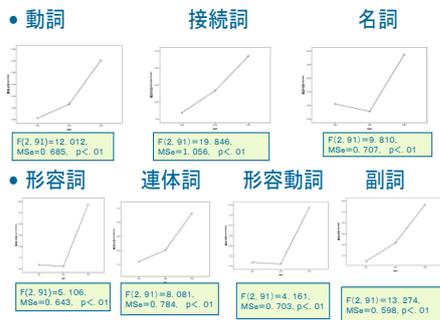
(2) 5段階評定尺度による評定の結果は、次図の通り。(縦軸＝理解度、横軸＝年齢)
A. 品詞ごとの年齢差(5冊)

品詞ごとの年齢差(5冊)



B. 品詞ごとの年齢差(2冊)

品詞ごとの年齢差(2冊)



(3) この結果から分かったこと、
ア. 〈図表1〉→連体詞・形容動詞・副詞は3・4・5歳の発達に伴い理解度も継時的増加が見られるが、動詞・接続詞・名詞・形容詞は4歳児の落ち込みが見られる。4歳がターニングポイントとなっていて、4歳から5歳にかけて、理解度が急速に伸びている。

イ. 〈図表2〉→同一絵本による理解度調査の結果、3・4・5歳の年齢の発達に応じて、基本的に各品詞の理解度が上がっていく。形容動詞が4歳から5歳にかけて急勾配なのは5冊の結果と同じであるが、形容詞と名詞が図表2では急勾配となっている。

ウ. 品詞間の相関関係を見るために、LSD法による多重比較を行ったところ、各品詞の相関が高い。3・4歳児には見られなかったことである。

→これらを総合すると、3、4歳では語(品詞)中心に理解する傾向が高く、文脈をとらえることが弱いのにに対して、5歳児になると、語と語を関連させ、文脈を理解する傾向が強くなるのではないかと考えられる。

(4) 「難しいことば」を評定者4名で、「生活に身近であるか」「ないか」を0-1評定した。評定結果をカイ二乗検定したところ、品詞による有意差は出たが、年齢による有意差はみられなかった。

年齢による差が出ないということは、子

どもにとって「身近なことば」は、発達的な枠組みに捉えられるのではなく、生活の中で、これらのことばとどのように出会わせるかが重要であることを示している。

(2) 小学校部会の研究成果

【研究1】「つまずきことば」の3段階判別

◇研究の目的…小学校の国語・算数・社会・理科、各教科書の中で、「学習者にとってスムーズな理解が難しく、何らかの手当てを必要とする(と予想される)ことば」(→以下、「つまずきことば」と呼ぶ)の実態を把握する。

◇研究の方法…徳島県下で使用する国語・算数・社会・理科の教科書における「つまずきことば」を調査する。長年教師をした経験に照らして、各教科の教師に「つまずき度」を次の3段階に判別してもらい、それをデータベース化する。

1. 自力では理解できないが、指導者が説明等をすれば、ほとんどの学習者が理解できることば。
2. 指導者がかなり説明等を工夫して教えなければ、理解させることが困難であることば。
3. 指導者が説明等をさまざまに工夫して教えても、理解させることが困難なことば。

◇調査の対象…当初は、現行の各教科書を対象として調査したが、本研究を実践の場に生かしてもらうために、平成23年度から使用される各教科の教科書に変更した。

→国語＝光村図書、算数＝啓林館、社会＝教育出版、理科＝啓林館

◇データ収集…現職の小学校教員(教職経験20年以上)5名。「つまずきことば」データ収集にあたっては、次のようなことを原則とした。

- ・重複したことばは、初出の学年に位置づける。
 - ・原則として、句レベル以上のことばは、除外する。
 - ・固有名詞(人名・国名・組織名等)は除外する。
 - ・付属語(助詞・助動詞)は、除外する。
 - ・活用形等は、終止形になおして位置づける。
- なお、今回の調査は、長年の教職経験のある教師が、これまでの経験に照らして主観的に判断したものである。本来ならば、学習者に対する語彙の理解度調査や使用語彙の調査等を行う必要があるが、今回はその基礎研究としてこのような方法を採用した。

◇調査の結果

平成23年度用国語・算数・社会・理科教科書の「つまずきことば」3段階評定をしてもらった結果は、次の表のようである。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
国語	86	250	375	241	468	375	1795
算数	12	36	37	62	50	27	225
社会	・	・	48		81	283	412
理科	・	・	100	95	115	139	449

各教科とも、各学年のデータベース化を図

つたが、その表は省略する。

【研究2】「つまずきことば」の品詞分類と語種

◇研究の目的…ここでは、国語教科書に絞って、「つまずきことば」の品詞分類と語種の傾向を明らかにする。

◇研究の方法…「つまずきことば」の品詞分類と語種を分析する。

◇「つまずきことば」の品詞分類

国語教科書第1学年～第6学年の「つまずきことば」1795語を品詞に分けると、次の表のように整理できる。なお、「名詞+する」の形で用いられている語は、名詞ではなく、サ変動詞として扱った。

	名詞	動詞	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	接続詞	感動詞	計
1年	57 66.3%	19 22.1%	2 2.3%	0 0%	7 8.1%	0 0%	1 1.2%	0 0%	86 100%
2年	159 63.6%	55 22.0%	9 3.6%	5 2.0%	20 8.0%	0 0%	1 0.4%	1 0.4%	250 100%
3年	262 69.9%	78 20.8%	4 1.1%	15 4.0%	14 3.7%	1 0.3%	1 0.3%	0 0%	375 100%
4年	197 81.7%	34 14.1%	1 0.4%	4 1.7%	5 2.1%	0 0%	0 0%	0 0%	241 100%
5年	313 66.9%	101 21.6%	7 1.5%	32 6.8%	15 3.2%	0 0%	0 0%	0 0%	468 100%
6年	264 70.4%	62 16.5%	11 2.9%	25 6.7%	12 3.2%	0 0%	1 0.3%	0 0%	375 100%
計	1,252 69.7%	349 19.4%	34 1.9%	81 4.5%	73 4.1%	1 0.1%	4 0.2%	1 0.1%	1,795 100%

表全体の傾向として、ものの名前を表す語（名詞）が約7割、動きを表す語（動詞）が約2割、ものの性質や様態を表す語（形容詞・形容動詞、副詞、連体詞）が約1割、という比率は全学年ほぼ一定しており、学年による大きな違いは見られない。そこで、それぞれの品詞の内容について検討し、何らかの特徴がみられたものを提示する。

まず、名詞に関しては、固有名詞は除外しているが、「いそぎんちゃく」（2年）や「コウジカビ」（3年）のような生物名が74語あり、名詞全体の5.9%を占めている。これらは、ものの名付けを行っている語であるが、その対象に生活の中で出会わなければ、辞書や辞典、図鑑などで知識として獲得することになる。この場合、体験をもって理解することができない可能性がある。

また、動詞連用形が名詞化した語（連用形名詞）も、「つまずきことば」に一定数見られる。このタイプの名詞は、61語あり、名詞全体の4.9%を占める。「わるさ」（1年）や「おろかさ」（6年）のように、接尾語によって生じる派生名詞（6語）よりも、明らかに数が多い。難度が高いと判定されていた連用形名詞の例は、次のようなものである。

つくり（1年）・うごき（動き）・つながり・はたらき（2年）、集まり・教え（3年）、味わい・つぐない（4年）、かかわり合い（5年）

連用形名詞がすべて「つまずき」の要因になるとは考えにくいだが、このリストをみるかぎり、これらは単純に「～すること」という意味を表す語ではなく、また「光」や「休み

のように具体的な指示対象を持たないという共通点がある。このような意味の抽象性や言い換えによる理解の難しさが、「つまずきことば」として指摘される原因になっているように思われる。

次に、動詞に関しては、和語が260語（動詞全体の74.4%）と圧倒的に多く、漢語サ変動詞は83語（同23.8%）にとどまる。和語の動詞で目立つのは「動詞+動詞」形の複合動詞であり、89語と和語動詞の3分の1を占める。

各学年に現れる複合動詞の例は、次のようなものである。

つまかさねる（1年）、立ちふさがる・弱りはてる（2年）、見立てる（3年）、ふりしきる・かかわり合う（4年）、飛びかう・したたり落ちる（5年）、いたわり合う・つき進む（6年）

この中には「～合う」のような生産性の高いものもあるが、基本的に、複合動詞は、前後の動詞どちらかでも意味が分からなければ理解できなかつたり、そもそも前後の動詞の意味を足し算しても全体の意味が予測しにくかつたりするという点で、学習者にとって意味を理解しにくい性質を持っていると言える。

副詞に関しては、「ひやり」（1年）、「いそいそ」（3年）、「あっさり」（6年）のようなオノマトペ（擬音語・擬態語）が35語（副詞全体の47.9%）と約半数を占める。

◇「つまずきことば」の語種

語種の付与は、国立国語研究所の語種辞書「かたりぐさ」を参考にしながら行った。和語・漢語・外来語のほかに、これらの組み合わせによって構成される「混種語」を立てている。

次の表は、「つまずきことば」を学年語種別に整理したものである。

	和語	漢語	外来語	混種語	計
1年	68 79.1%	15 17.4%	1 1.2%	2 2.3%	86 100%
2年	170 68.0%	57 22.8%	6 2.4%	17 6.8%	250 100%
3年	194 51.7%	139 37.1%	16 4.3%	26 6.9%	375 100%
4年	84 34.9%	122 50.6%	13 5.4%	22 9.1%	241 100%
5年	145 31.0%	278 59.4%	13 2.8%	32 6.8%	468 100%
6年	130 34.7%	199 53.1%	16 4.3%	30 8.0%	375 100%
計	791 44.1%	810 45.1%	65 3.6%	129 7.2%	1,795 100%

「つまずきことば」の語種は、1年生では和語が約8割を占めているが、学年が上がるにしたがって漢語が徐々に増え、4年生で和語と漢語の割合が逆転する。

ただし、小学校教科書の語彙全体の傾向も、学年が上がるにつれて和語の割合が下がり、漢語の割合が上がるのが指摘されている。データが異なるため単純な比較はできないものの、和語と漢語の逆転現象は、「つまず

きことば」だけでなく、教科書の語彙全体に見られる傾向と解釈すべきではないかと思われる。

一般的に子どもにとって和語と漢語では和語の方がより理解しやすいと考えられており、また漢語に特化した指導方法の研究も見られるが、低学年の「つまずきことば」の多くを和語が占めている状況からは、少なくともこの段階では、和語を中心とした配慮が必要であるということが分かる。

次に挙げるのは、低学年の「つまずきことば」で難易度が高いと判断された和語の例である。

しめす(示す), つむぐ(紡ぐ), やぶ(藪), よろこびいさむ(以上, 1年), いきおい(勢い), おさめる(治める), かかわる, しぐさ, できごと(以上, 2年)

これらを見るかぎりでは、やはり、抽象的な概念を表す語が難しいと判断される傾向にあるように思われる。

【研究3】「つまずきことば」の分類

◇研究の目的…「つまずき」を克服するための指導方法を考えるために、岡本夏木とヴィゴツキーの論を援用して、【研究1】の調査で抽出された「つまずきことば」を4分類する。

◇研究の方法… 岡本夏木のいう「1次のことば」(=子どもの日常に近い語)と「2次のことば」(=子どもの日常から遠い語)の視点と、各教科に固有の語と固有でない語の視点から、次のような分類する4視点を設定する。

	子どもの日常に近い語	子どもの日常から遠い語
教科に固有な語	(I)	(II)
教科に固有でない語	(III)	(IV)

表の横軸は、語彙における「子どもの日常生活からの距離」という観点である。教科書に出現するある語が、学習者が普段の生活においても使われる種類のものであるのか、そうでないのかという分類を表している。

◇各教科の分類データの作成

各教科ともに、上記4視点からデータベースを作成したが、省略する。

◇4分類のタイプ解説

日常の生活から遠いタイプの語であれば、特定の機会に意識的な指導を行うことが必要になる。

一方、表の縦軸は、語彙の「教科固有性」という観点であり、教科書に出現するある語が、特定の教科で特徴的に使用される語であるか、あるいは、特定の教科に限定されない(教科横断的な)使い方がされる語であるのかを表している。

もし前者であれば、その語は教科固有の

科学的な概念として理解する必要があり、後者であれば、より一般的・汎用的な概念としての理解(場合によっては、それに加えて各教科の文脈に沿った理解)が必要になる。

このように、教科書の語彙を4つのタイプに分類したうえで、それぞれの特徴を見ていくことにする。

まず、(I)のタイプの具体的な例としては、例えば理科の「動物」が挙げられる。「動物のような食べ方はやめなさい」という例から分かるように、日常的な理解として、日本語の「動物」は「人間」の対立概念として捉えられるが、生物学的な「動物」は、「人間」も含めた形で定義される。このような、特定の教科で日常生活における意味とは異なる理解を要する語を、教科書の語彙の一つのタイプとして指定することができる。

次に、(II)のタイプの例としては、国語科の「主語」や理科の「塩酸」、算数科の「円周」のように、一種の専門用語として、それ自体が学習内容として学習される語を挙げることができる。これらの語は、事象を科学的に捉えるためのメタ的な概念であり、それゆえに日常生活の文脈の中で習得される語彙とは性質が異なると言える。

(III)のタイプの例としては、国語科の「(文章の)組み立て」や社会科の「(日本との)つながり」のような、抽象的概念を表す語を挙げることができる。特定の教科で取り立てて扱われるものではないが、日常的・辞書的な意味の理解のうえに、教科の文脈に即した理解が求められる語である。

最後の(IV)のタイプは、いわゆる理解語彙に近いと考えられる。「いろり」「煎じる」のような昔話に見られる語、あるいは国語科の「うららか」「登記」のような語は、小学生の日常生活で経験する機会がなくても、文章や話題に現れた場合には何らかの形で意味を理解することが求められる。

ごくおおまかにまとめると、表の(I)(II)のタイプが「○○とはこれこれを指す」のように「定義される語」であるのに対して、(III)(IV)のタイプは専門性が低く、そのような形式的な手がかりが与えられずに理解されていることを前提として、「定義や説明に使われる可能性のある語」とであると考えることができる。

【研究4】「つまずきことば」の指導法

◇研究の目的…これまでの研究をもとに「つまずきことば」を克服する指導法を提案する。

◇研究の成果…ここでは、各教科に通じる基本的な指導の工夫を記すこととする。

(1) 生活的な体験を通して、「つまずきこと

- ば」を実感的に理解させること。
- (2) 「つまずきことば」を身近なもの・ことに結びつけて理解させること。
- (3) 「つまずきことば」の意味を子ども自身が自ら考え、見出すようにしむけること。具体的な各教科の指導法については、2011年3月刊行予定の日本標準の著書で提案したい。

(3) 全体の研究成果

幼児期から小学校への移行過程を縦断的に見据えて、どのように「2次のことば」を習得させるとよいかについては、残念ながら明らかにすることができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計11件)

- I. 第1回徳島乳幼児・児童教育実践研究大会・四国大学・平成20年2月2日)
- ①前川恵美「ことばを育てるための保育環境」
- ②山村玲子「5歳児のことばの実態とその考察」
- ③山口寿子「生活習慣の自立とことばの獲得との関係についての一考察」
- II. 第2回徳島乳幼児・児童教育実践研究大会・四国大学・平成21年2月1日)
- ④森本咲織「多様な関わりの中で育つコミュニケーションカーA児の事例を通して一」
- ⑤森浩子「1歳児のことばをひらく感動体験—友だちや小動物とのかかわりを通して一」
- ⑥山下美織「5歳児の心とことばを育む保育の試み—童謡『どんぐりころころ』の替え歌発表会を開く一」
- ⑦藤田賀史「小学校第五学年におけるモデル文を活用した作文指導の試み—児童一人一人の書く力の発達段階をふまえて一」
- ⑧横山武文「小学生がつまづく語彙の調査と指導法の開発—国語科教科書教材を取り上げて一」
- III. 第3回徳島乳幼児・児童教育実践研究大会・四国大学・平成21年12月6日)
- ⑨勝浦千晶「遊びや生活の中におけることばの広がりについて—4歳児を中心に一」
- ⑩田中敬子「豊かなことばを育む保育—自然を呼び込んだ園内環境の工夫を通して一」
- (注)徳島乳幼児・児童教育実践研究大会第1回～第3回大会は、本研究の代表者である世羅博昭が中心になって、「ことばの発達」を研究テーマのもとに開催したものである。
- IV. 平成21年度四国大学人間生活科学所第3回例会(四国大学)
- ⑨富田喜代子・村上涼「絵本の中のことば—保育者から見た子どもにとって難しいことば—」

〔図書〕(計1件)

①仮題『小学校国語・算数・社会・理科教科書におけるつまずき語の類型と指導法の開発』(日本標準・2012年3月刊行予定。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

世羅 博昭 (SERA HIROAKI)
四国大学・生活科学部・教授
研究者番号：30171359

(2) 研究分担者

米村 佳樹 (YONEMURA YOSHIKI)
四国大学・生活科学部・教授
研究者番号：90122580

(H19→H20～：連携研究者)

鈴木 敏昭 (SUZUKI TOSHIKI)
研究者番号：70179232

(H19→H20～：連携研究者)

奥村 英樹 (OKUMURA HIDEKI)
四国大学・生活科学部・教授
研究者番号：80233477

(H19→H20～：連携研究者)

富田 喜代子 (TOMIDA KIYOKO)
四国大学・生活科学部・講師
研究者番号：70441582

(H19→H20～：連携研究者)

村上 涼 (MURAKAMI RYO)
四国大学・生活科学部・講師
研究者番号：10412389

(H19→H20～：連携研究者)

森本 泰二 (MORIMOTO YASUJI)
研究者番号：50320099

(H19→H20：連携研究者)

秋田 美代 (AKITA MIYO)
鳴門教育大学・学校教育学部・准教授
研究者番号：80359918

(H19→H20～：連携研究者)

茂木 俊伸 (MOGI TOSHINOBU)
鳴門教育大学・学校教育学部・講師
研究者番号：20392540

(H19→H20～：連携研究者)

(2) 連携研究者

村上 一三 (MURAKAMI ICHIZO)
四国大学・生活科学部・教授
研究者番号：70210002